

末黒野

すぐろの

11月号 (通巻879号)



秋の蝶

濁世に咲き穢れを寄せぬ白芙蓉
水色を手離さぬ空酔芙蓉
風やさし翅小刻みに秋茜
木槿垣寺の閑伽桶みな乾き
梵鐘の乳へへらへらと秋の蝶
絡まりつほぐれつ森へ秋の蝶
野の草を尺と離れず秋の蝶
デイパツク置くや止まりぬ赤蜻蛉

松本三千夫

(名譽主宰)

鰯雲

押さへてもふくらむ封書秋はじめ
につき玉一つふみぬ涼新た
九月来る母の忌日の絵蠟燭
新涼の青森駅のおばこかな
石垣も磴も島石鬼やんま
古墳より眺むる古墳鰯雲
どの家も垣めぐらさず法師蟬
新しき木椅子の香り風は秋
星飛ぶや夜明けの前は闇を濃く
雲とれて沖の一線小鳥来る
山宿の下駄の焼印昼ちちろ
ぽつねんと縁切寺や男郎花

黒滝志麻子

(主宰)

岩雲

森

清

(副主筆)

堯

噴水や子等惑はする伸び縮み
青柿や己が生き甲斐これからと
結語練る黙のひととき梅雨夕焼
夏帽の鏝にそと触れ遠会積
築山を見詰むる庭師梅雨の明
空蟬や硝子細工と紛ふやう
夏の果て平平の日を倦みもして
秋立つや瀬の風さつと草の見せ
岩雲の朝を動かさず広島忌
短冊の墨書の英字星祭
榊の木の瘤の抱ふる残暑かな
酔芙蓉川の夕風やはらかき

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

苔清水

森清信子

日を弾く高原列車青葉濃く
半夏雨烟る古民家ずつしりと
隆隆たる杉の走り根苔清水
青胡桃雲湧く山の風を呼び
トロ箱に余る尾鰭の鯉かな
寄せ返す万変の波大夕焼
素通りの回送バスや日の盛
鉄塔の影置き田水沸きにけり
落日の脈打つ色や夏の富士
撫牛の火傷しさうに灼けてをり

秋暑し

安斎久英

花火待つ宵の明星仰ぎつつ
噴水の穂先出たとこ勝負かな
燕の子つぶてのさまに耳かすめ
打水や日向の匂ひさつと立て
山の日や頂星を殖やしつつ
秋に入る沖の白波競ひ立ち
秋立つや安房の稜線くつきりと
秋暑し髪の先までからびゆき
文机に日差し及べり秋暑し
日暮待つ敗戦の日をしみじみと



月下美人

石黒興平

長老の一声神輿立ちあがる
招かれて月下美人と赤ワイン
仲居つと灯を消し庭の宵螢
手がこひや指間を洩るる螢の火
鮎をほめ焼き方をほめ峽の宿
篝火の崩れ鵜飼の果つる頃
みんみんやカーテン揺るる懺悔室
店先の樽のテールビール干す
七難を隠し似合ひのサンダラス
宿下駄のゆるき鼻緒や夕河鹿

合歡の花

岡野里子

一山の暮色や薫る百合の花
御祭風島の社の幣ちぎれ
風孕む雨の里田や夏蛙
波立つる田の面背山の時鳥
捨苗や隅に根付けける束太し
一塊の夏雲飛ぶや八ヶ岳
汲みこぼす水車の音や合歡の花
風生まる里田の畦の野萱草
蓮の花池に余白のなきままでに
夏草や富豪商家の屋敷跡

遠花火

菅野日出子

対岸の茅花流しや左千夫の忌
参道は風の抜け道今年竹
雨意きざす雲の切れ間や遠花火
初蟬や雨の止み間の雑木山
雨傘の杖と変りぬ梅雨夕焼
今年またふへて路肩の小判草
旅終へて薬味をきかず冷奴
久々に研ぐ和包丁鯖さばく
ガレージは半ば開かれ燕の子
蟬しぐれ寺の大樹をふるはせて

盆

田中臥石

波どんと梅雨の銚子の隠れ岩
梅雨明や叫びたくなる海の碧
凌霄や海へ背を向け智恵子の碑
網戸透く鶉の群るる松林
鰯釣つて歓喜の妻のサンガラス
髪洗ふ妻の履歴のエレベーターガール
花火揚がる浜に住み古り二階窓
雨風の時化の海鳴り送り盆
庭透くる棚経僧の褐の袖
娘来て息子来て盆僧も来ぬ

乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



土用波 堺 昌子

山青し滝の白さをなほ白く
音よりも目に鮮やかや土用波
キャンバスに写生の子等や濃紫陽花
帽子手にくぐる夏越の大祓
折り紙の教室汗を収めたり
桃もぐや三つ目までとガイドより
人声や雀とび立つ竹の春

青胡桃 齊藤マキ子

星涼し 高木邦雄

でむしや平成ひと日づつ遠く
棹斜め船頭斜め船遊山
的射たる矢羽涼しくふるへをり
石走る水の白さや青胡桃
噴水をぐしよ濡れにしてざんざ降り
山の日や竿しなふほど物干して
地名また変りし故郷盆の月

和太鼓を統ぶる漢や汗淋漓
街極暑喚めく如くに救急車
図書館はわれの避暑地や大没日
撤収のコンビニ跡や月見草
夜の闇包む阿夫利嶺星涼し
曙光の赤富士よぎる雲速し
白萩や香煙なびく父祖の墓地

梅雨明 今村千年

街騒の届く溪谷蟬の声
滝音も瀬音もかすか遊歩道
上品下品のおはす御寺や著莪の花
梅雨明や潦また潦
鱧の皮遠のきていく笛太鼓
洗ひ髪あめつち少し新しき
駅まではいつもこの道花芙蓉

夕立 及川照子

田の神の大喝采の夕立かな
大夕立流人の多き佐渡島
百日の一日の紅や百日紅
俎板を打楽器として胡瓜もみ
捨て舟の崩れ支へて芦茂る
コスモスの中まで鐵路山の駅
再読の芙蓉の人や酔芙蓉

溪の道 大川暉美

梔子の闇柔らぐる匂ひかな
草刈られ積まるる畦や匂ひ立ち
眼前の棚田膨らみ青田風
せめぎ合ふ青葉に噎ぶ溪の道
仁王門入るやたちまち蟬時雨
炎天の重さを傘に帰宅の歩
推敲の一字決まりぬ溽暑の夜

籐椅子 岡田史女

かたつむり思ひの丈を背負ひけり
籐椅子に沈みて昨日遠くせり
しらを切ることも大事や心太
使はずに減りし香水谷崎忌
風涼しぼんぼり祭の茶の席に
きらら虫走るや母の備忘録
舞殿のジャズコンサート秋初め

哲学者

小田嶋野笛

香水の総身へ甘き熟寝かな
息を止め団扇を止めて土俵際
父母兄妹遠くなりけり夏衣
椅子カバー縮に替へて般若経
内に干す物の匂へる大暑かな
哲学者めく猫とゐて夕端居
横書きの句の来る暑中見舞かな

病葉

加藤静江

梅雨晴や草の匂ひの立ち上がり
産土の静寂に香る茅の輪かな
病葉や黙を深むる切通し
炎昼の海へ向きをり方位板
雷雲や急げど遅きタダポト
行き合ひの空彩るや大夕焼
大楠の梢ゆるがせ風は秋



青炎集

黒滝志麻子選



横浜 長尾タイ

蟬穴をつつく少年黙の底

草矢打つ語り尽くせぬ遠き日々
夏木立横笛庵の寂寂と
園庭の朽つる石棺苔の花
間仕切りを払ふ古民家青葉風
海難碑少年の名の灼けてをり

横浜 廣田幸子

晴れ晴れと渾身の書や汗拭ひ
坂道の帰路は二倍となる夏日
玄関の蚊取線香客を待つ
爺と遊ぶプールに付ける滑り台
休日のたちまち昼や冷素麺
焦ぐる香の音なき町や炎天下

横須賀 福田禎子

炎ゆるごとと天と大地とさるすべり
大波の崩れサーファー裏返へる
夏の夜のライブや路上ピアノニスト
浜木綿や月の雫と波の音
渾身で殻脱ぐ蟬や薄緑
熱帯魚夜の銀座を行くとき

横浜 佐藤喬風

しりとりも飽き渋滞の冷房車
揚げ花火息調へて開きけり
ねずみ花火の逃げまはる子に迫りけり
雲の峰分水嶺の水を汲み
梅雨明や舌に弾くる発泡酒
裸婦像の伸ぶる手の先落し文

横浜 梅田 武

夕刊の見出し立ち読み夕立あと
貫禄の妻の着こなしアツパツパ
権太坂花の二区行く蟻の列
梅雨明やどんと三竿の濯ぎ物
八月の祈りはじまる六日かな
天高し腕白快心の一打

横浜 福澤 聡子

薫風や川中島の古戦場
公園にベンチ一つや立葵
綿菓子年味なつかしや夏祭
唐辛子小袋で買ふ道の駅
香煙の中で聞きをり迎鐘
草の市家守る人に手を貸して

横浜 戸田 澄子

一夜明け秋立つ風となりにけり
終戦日廊下に立ちしことありき
炬煙舎は詩のふるさと自木槿
見ゆるものすべて詠めよと秋の風
深夜バス降りて家路や虫の闇
吾よりも背高き子らや花すすき

横浜 鍋島 武彦

一服の茶に憩ひをり苔の花
さきがけて風の湿りや夕立来る
草笛や竹馬の友の野辺送り
山に逝きし友の墓標か雲の峰
縁日や母子揃ひの浴衣着て
初浴衣子のぎこちなき裾さばき

横浜 宮元 陽子

風鈴市風一吹きに皆呼応
風鈴市産地の景を音にのせ
菖蒲田の風通りたる茶会かな
胸を張り三段跳の玉の汗
田水沸く山を目指せる路線バス
秋服のカタログ届き夏惜しむ

相模原 内田 梢

卓五つ句座の熱気や秋立ちて
遠山の夕日眩しやカンナの緋
山の日や山の空気の欲しきまま
終日を静かに過ぐや終戦日
稲妻や神の怒りに触るる如
山並は露立ち律の調かな

耕 土 集

森清 堯選



すててこや腰の曲がるも威張りん坊
脛長き少年の夏奔放に

横浜 岩崎 藍

幾重にも松山を越えて紀伊葉月
人の背見送る埠頭秋茜
島一つ繋ぐ水尾濃し秋気澄む

横浜 渡辺美智子

半夏雨一言多きこと悔ゆる
幽かなる水の匂ひや半夏生
朝挽ぎのトマト青き香青き味
夏雲の湧くも消ゆるも尾瀬ヶ原
友逝くやくちなしの白闇に浮き

横浜 吉原ひろ子

草の影かすかに揺れて日の盛
夕涼や漫る歩きの下駄の音
晩酌のぢぢや幼の団扇風
暮敵を待ち受くる部屋蚊遣香
近道のさらに近道青田道

登山道茶屋の残骸そこここに
赤富士や豆煮る茶屋の勝手方
べた風の波待ち時や冷し汁
秋立つや熊よけ鈴の忘れ物
星月夜光の列は頂へ

横浜 加藤直人

もろこしや一歯たりとも欠けあらず
霊峰を仰ぐ故郷や蟬しぐれ
元号の替はりて初の梅を干す
朝顔の波郷の紺をもて開く
ほほづきを鳴らせて見せぬ子供らに

新潟 太田チエ子

パドックの忙しき尾つぽ蚊の捻り
肩寄する寸刻破る藪蚊かな
蚊柱や屹立として大鳥居
五月雨や病院静かに賑はへり
梅雨晴間夫婦揃ひてクリニツク

横浜 伊藤 鴉

朝顔

小川 玉泉

(名誉顧問)

白百合の花をうちのめ大雨過ぐ
何も彼も子に委ねたり盆支度
子と共に送り火無事に済ませけり
夕闇へ声を限りのつくつくし
法師蟬鳴き出づ妻の七回忌
紅と白鉢の朝顔競ひをり

雑記帳 28

日本を取り巻く国と国との争いが、激しくなった。交通機関の発達によるところが大きい
が、私利私欲の追求のはげしさによる様に思う。